

あとがき

私達の「類型学研究会」は、2000年の春頃から始まったと記憶している。そして後々のため日本における内容類型学の研究史のために書き添えれば、この研究会は山口巖先生による類型学研究が源である。具体的には、1984年にロシア・ソヴィエトの類型学研究等に関して、大阪外国語大学において集中講義をされた同先生の活動が、そもそもの始まりである。同先生の研究は、おそらく80年代前後からであろうか、詳細についてはすでに忘却の彼方であるが、パソコンが普及していなかった当時、同先生の手書きの分厚い講義ノートは、様々な学的情報交換の場でもあった日本古代ロシア研究会の席上そこに集っていたメンバーにコピー回覧され、私も大いにその学恩に浴した一人である。90年代に入って論文「ロシア語の類型学的考察」（『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂1990年9月）が公表され、さらに待望の著『類型学序説 ロシア・ソヴェト言語研究の貢献』（京都大学学術出版会1995年10月）が上梓されるに及んで、日本において内容類型学の全貌は一挙に公になったといえる。この前後にかけての、内容類型学に関する一連の諸論文は、『ことばの構造とことばの論理』（山口巖教授停年記念論文集 日本古代ロシア研究会1998年7月）に多数収録されているが、最近も著書『人とことば—その関わりと研究のあゆみ』（鳥取環境大学2004年8月）や『ロシア文法の周辺 一般言語学への招待』（日本古代ロシア研究会2005年3月）等々、同先生の旺盛な活動は止まるところを知らない。こうして同先生の研究活動を通じて明らかになった内容類型学に関する知見は、近年わが国における言語類型学の動向そのものは勿論、個別言語研究にも大きな影響を及ぼしつつあると思われる。一方、わが国でも類型学研究の分野ではフンボルトやサビアが紹介されて久しく、さらにまた近年グリーンバーグ、ディクソン、コムリー等の名が取り沙汰されるが、クリモフ等の内容類型学の説明力やその有効性に共鳴する研究者はまだまだ少数である。我等一同、古稀を迎えられた同先生の益々の御活躍を期待する所以である。

ところで、わが国における類型学研究のエピソードとして、もう10余年も前に東大でB.コムリー氏がサバティカルをすごした時期を契機として松村一登氏（ウラル学、言語学）が中心になって発足した類型学ワークショップがある。そのときの集まりは、「この共同研究プロジェクトは・・・個別言語の研究者自らが、言語類型論の研究者の協力を得て、言語類型論の視点から自らの研究を再検討することによって、個別言語の研究と言語類型論の研究の双方にとって最適の研究のパラダイムを構築することをめざすものである」、と宣言している（松村一登「個別言語の文法研究と言語類型論」月刊「言語」大修館書店1994年9月号）。

同氏はまた、「言語学が今抱えているいちばん深刻な問題は、多くの研究者たちが希望を託してきた統一的な言語理論の試みとしての生成文法が頓挫しつつあり、文法研究のパラダイムそのものが大きな変換期にさしかかっていることである。生成文法の試みが成功すれば、たこつば的に続けられている個別言語の研究者相互のコミュニケーションが容易になるはずであったが、現在どうひいき目に見てもその見込みはなさそうである。このような現状において、個別言語の研究者達に、相互コミュニケーションのための共通の土壌を提供してくれると考えられるのが、類型論の方法である。私のこの見解に対して、いや、たとえば、認知言語学があるではないかという反論もあるだろう。しかし・・・認知言語学の基本的な主張として挙げられることがらの多くは、すでに個別言語の研究者達が日常的に行ってきたことの『気の利いた一般化』にすぎないことが多いのだから、わざわざ自らを文法研究の大きな枠組みにまで高めて、生成文法と対抗しようとすることに必然性があるとは思われない。認知言語学を唱える人たちは、英語のような特定の言語の研究の中でその存在を主張するよりは、むしろさまざまな個別言語の具体的な言語事実の研究を目指して自らを試した方がいいのではなかろうか」（同論文）、と非常にラディカルな発言を交えて、類型学への期待を語っておられる。ヨーロッパ中心主義を批判し類型学の視角から日本語を切る角田太作氏のEigo-centrism（『世界の言語と日本語』くろしお出版 1991年）という評価とともに印象深い。

橋本萬太郎氏もすでに「類型学の視角」（月刊「言語」大修館書店 1979年 11月号）の中で、類型学こそ言語研究の根本に関係するものとする認識を示し、現代類型論の課題について語っている：「現代の言語類型論の課題は、共時的には個々の言語の類型構造を全体的に把握することによって、その言語の構造の各部分がいかにあり、一歩すすんでなにゆえそうあるかを予告的（プレディクト）に解明することにある。通時的には各種の言語の類型構造の発展原理をみることによって、一方では人間の言語のあり方に対する一般理論に寄与するとともに、他方ではその観察・分析をとおして個々の言語の共時相のあり方にかんするいかにとなにゆえにとをあきらかにする点にある。つまり言語研究の一番根本に関係しているのである」。私達もまた、松村一登氏や橋本萬太郎氏と同じような期待をもって類型学研究会に集うたのであるが、類型学不信がある一方で、このように今や類型学を重視しそれに期待する言語研究者は決して少なくないと思われる。類型学への期待は多くの研究者の共通認識となりつつあるといえるのではないだろうか。たとえば最近、アカデミズムに対する強烈な反骨精神のもと一般向けに書かれた金谷武洋著『日本語に主語はいらない』（講談社選書メチエ 2002年）、「英語にも主語はなかった」（同 2004年）も、類型学への熱い思いを語っている。

しかし、類型学への期待が即内容類型学そのものの理解と共鳴に直結するには今しばらく時間がかかりそうである。日本における私達の活動が、その意味で歴史的にも大きな意義を持ち得るようなものでありたいと願っている。

内容類型学は、直接的には旧ソ連邦において1970年代から80年代にかけてG. A.クリモフ(1928-1997 カフカース学者、言語学者)等によって集大成された言語研究の到達点であるが、そこには30-40年代から続いて来たマールやメシチャニーノフ等のいわゆる「新言語学」(Novoe učenie o jazyke) 潮流に繋がるパトスの余韻が感じられる。またクリモフ自身、内容類型学の発展に関連して、「活格構造理論の成立に最も寄与したのは、印欧語学と能格理論であるといっても過言でない」(『新しい言語類型学 活格構造言語とは何か』三省堂 p.7)と語っているように、クリモフの仕事の基盤には内外古今にわたる研究者の大小幾多の研究活動の成果が積み重なっていることは間違いない。クリモフは、内容類型学に繋がる三種類の研究系統として、①最古段階の印欧語構造研究、②能格理論問題研究、③活格構造言語の実証的言語記述研究、を挙げているが、これら三系統が「長期にわたってほとんど接点を見だし得なかった」(同上)と述べている。クリモフが、「類型学研究の一連の著作は私に大きな労苦(trud)と根気(uporstvo)を要求するものであった」(筆者への私信、1995年9月)と述懐していることから窺われるように、この仕事への集中に忍耐を込めてその接点を見出し繋いだ人こそクリモフであった。

内容類型学の構想全体と個別言語学におけるその具体的応用(例えば個別言語における他動性と非他動性、能動相と中動相と受動相、主格と対格、テンスとアスペクト、語順等々の問題)については、上述の山口先生の一連の著書、論文等を初めとして私達研究会メンバー各人の仕事によってもすでに公になっており、ここで解説そのものを行うことは適当でない。ただ初めて内容類型学に接しようとする読者諸氏は、特に山口先生の上述の『類型学序説』とともに『ロシア語の周辺 一般言語学への招待』が、「類型学の展開、クリモフの内容的類型学、活格言語タイプ、包含事象と随件事象などの基礎概念をときあかしており、ロシア語に通じていない読者にも、一般言語学の、とりわけ類型学の理解を深めるのに役立つ」(松本泰丈『連語論と統語論』 p.311 至文堂 2006年3月)書であることを、最後に付言しておきたい。

山口先生の古稀をお祝いするとともに、これを期に多数の学徒の研究会への参加を願ってやまない。

石田修一